

研究・調査報告書

報告書番号	担当
90	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)	
Association between alcohol consumption and cognitive impairment in Southern Chinese older adults. 中国南部における高齢者の飲酒量と認知機能障害の関連について	
執筆者	
Chan KK, Chiu KC, Chu LW.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Int J Geriatr Psychiatry. 2010 Dec;25(12):1272-9.	
キーワード	
アルコール、認知機能障害、中国、加齢	
要 旨	
背景： 中国人における認知機能障害のアルコール消費量の効果を示す限られたデータである。	
目的： 南中国と香港における高齢者のアルコール消費量と認知機能障害との関連を調査するためのものである。	
方法： 314人の65歳もしくは65歳以上を対象とした断面調査である。対象者の社会人口統計、過去の合併症、飲酒習慣、そして認知機能の検査のため精神疾患のテスト(MMSA)は直接的なインタビューで調査された。対象集団は教育と調整されたMMSEテストのカットオフ値において、認知機能の正常群と障害がある群(以下“障害群”とする)に分類された。	
結果： 対象集団における平均年齢は79.9歳(6.5歳)であった。平均的な習慣の飲酒量は障害群は正常群と比較し有意に多かった(SD: 861.89(673.03): 241.21(276.26)g/週、 $p < 0.001$, t検定)軽度から中等度の飲酒量は、まったく飲まない群と、多量飲酒の群と比較するとMMSEテストは高い結果となった。ロジスティック回帰分析では、多量飲酒者(男性では400g以上、女性では280g以上の飲酒者)は認知機能障害のリスクを上昇させることと関連していた。(OR: 4.99, 95% CI 1.8-13.82), 軽度飲酒者と中等度飲酒者(男性では400g未満、女性では280g未満の飲酒者)ではリスクを下げる結果となった(OR: 0.32, 95% CI 0.12-0.86, OR: 0.17, 95% CI 0.06-0.51)。また運動や年齢はそれぞれ保護的に作用するか、もしくはリスクを上昇させるかということに関しては無関係であった。	
まとめ： 中国南部と香港における高齢者のアルコール消費量と認知機能障害との関連では、多量飲酒は認知機能障害のリスク上昇に作用し、軽度、もしくは中等度飲酒ではリスクを下げる事が分かった。	